

立ちどまる

—浪人はオケの指揮者……私の二十歳のころ—

服部公一

私は立ちどまることがにがてである。

いつでもせっせ、せっせと歩いていないと気がもめてならぬ。い。

しからは私は勤勉であるのか、というところがまたそうでない。ぎりぎりまで仕事をため、すべてこれお座なりのやつつけ精神で切り抜ける。きり抜けてはっとすると同時に、ポケーッとして、何かしのこしいやしなかったらうか、何か次にとりかかることはないかと座敷の中をうろろし、どうせ敷^まへびになることわかりきっている電話をかけ、よしなし事をいっばい身のまわりにつみかさねることができると、そこでやっと気がおさまるのである。

そしてまた、ごちよごちよと思いわずらい、しかめつつらをし、自信と自信そう失、優越感と劣等感のいりまじったため息をつきながら毎日を暮している。

こんな私が、今から二十何年前、たった一度だけ、連続二年にわたって、立ちどまったことがある。

それは大学入試を三年にわたって、全七回にわたってすべったからである。三年に七回であるから、ずいぶん念のいった落ち方をしたものであるが、いずれも理科系、医科系の学部をまたにかけてのことであった。ちなみに申せば私は、当時医者かせめて科系の方向でご飯をたべたいと思っていたのである。

もちろんそれ以前から作曲を志しそれなりの勉強もし、若干の習作を書きためてはいたものの、これがいわゆる、食べにくい職業であることは、私の生家が彫刻家という名の貧しい職業芸術屋であったことから、文字通り身にしみて知っていたし、あえて、

清貧に安んずる勇氣のない私は、他に生計の道を求めようとはかっただけであった。しかし、結果はこの通りの大不作大会となり果ててしまい、私は兩二年の間浪々の身をすごした。しかし、私は

ここでどーんと徹底的に浪人生活をする勇氣がなかった。氣の小さい、ごちょごちょ屋の私は、この浪人生活中にさえ、いろいろとよしなし事を出していた。

その第一は浪人一年目に彫刻をしたことである。それをよせばいいのにある展覧会に憶面もなく出品し、まぐれで入選し、さらに許し難いことに買手がついて、金五千元也を手にしたのだから恐れ入ってしまう。私はその五千元をしっかりとにぎりしめ、当時初来日した、世界的なピアニスト、ギーゼキングの演奏会を聞きにいそいと上京し、その名演奏にじびれたのである。

よしなしごとの第二は、浪人二年目に、アマチュアオーケストラ結成に参画し、その指揮者になってしまったのである。

このオーケストラには、お医者さん、お役人、銀行家、会社員、学生、等々、いろいろな人たちがいて、指揮者の私が、一番人生未熟者、というふうであったが、私はこれらの人たちを師とおおいで、ここで人生最高の勉強をしたと思っている。

未熟者が指揮棒をふるって、ベテランたち……たとえその音楽的水準に難点があるにもせよ……を、何とかまとめて、音楽を創りだしたことは、今考えてみてもどうしてあんなことがやりぬけたのか、私にもよくわからない難事であったし、その行為の中で、私は本当の人間くさい教育をうけた。しかし、このアマチュ

アオケは、立派に創立音楽会を開催、モツァルト、チャイコフスキーなどの名曲を迷演奏で飾ることができたのではあった。

この事が私の人世的な、曲り角となって、芸術家の清貧の意味がわかりかけ、いたし方なしにはあったものの直接音楽に向かったのである。

このアマチュアオケの道草で、私が得たことを要約すれば、人間みな、その日その日をカツカツに生きている人たちがかりだ、ということを知ったことであるともいえよう。他に生計の道を持ち、ゆうゆうと趣味的に作曲をしてやるう……などと思つた私が、いかに浅はかであったか、をアマチュアオケの人々とおつき合い願うことのなかで知つたのであった。

私は当時、たまたま指揮者であつたけれど、私の人生交響曲は、明らかに、あのアマチュア音楽家たちによって見事に指揮されてしまつていた。

しかしこれが、私が浪人として立ちどまつたことの効用になるのかどうかは、まだわからない。それが幸であつたか不幸であつたかは、私が死んでしまつた後に、誰かさんがきめてくれることであつて、私の全くあすかり知らぬところである。

(作曲家)